

6年目を迎えた豊山町町民討議会

大久手計画工房

伊藤 雅春

① ミクローマクロ媒介問題へのアプローチ

市民社会は、独立した個人の集合体であると言われる^{注1}。この市民社会における集団と個人との関係を再構築することに現代社会の大きな課題があるといつてよい。熟議民主主義実現の課題もこの点にある。コミュニティは市民社会と個人の間領域にあり、両者を媒介する役割を担う可能性のある重要な概念である。

社会と個人の二つを架橋するコミュニティを現出するための実践的なアプローチとして、「コミュニティを対象とした市民討議会の継続開催」を提案したいと思う。この提案がもたらすであろう最終的な目的は、コミュニティ・マネジメントとコミュニティ・デモクラシーの実現である。

コミュニティに対する期待は、共助のための装置として、あるいは行政と協働する公共サービスの提供装置として、過剰と言えるほどの高まりを見せている。コミュニティ・マネジメントに対する政策的な関心は拡大するばかりだが、コミュニティ・デモクラシーを実現する具体的な手法は置き去りにされているのではないだろうか。こうした問題関心からも豊山町の町民討議会を位置付けることができる。(ここでは、豊山町において実施した市民討議会を町民討議会と呼んでいる。)

② 豊山町町民討議会の5年間

ミニ・パブリックスは、より多様な市民の意見形成をするための参加民主主義の手法である。そ

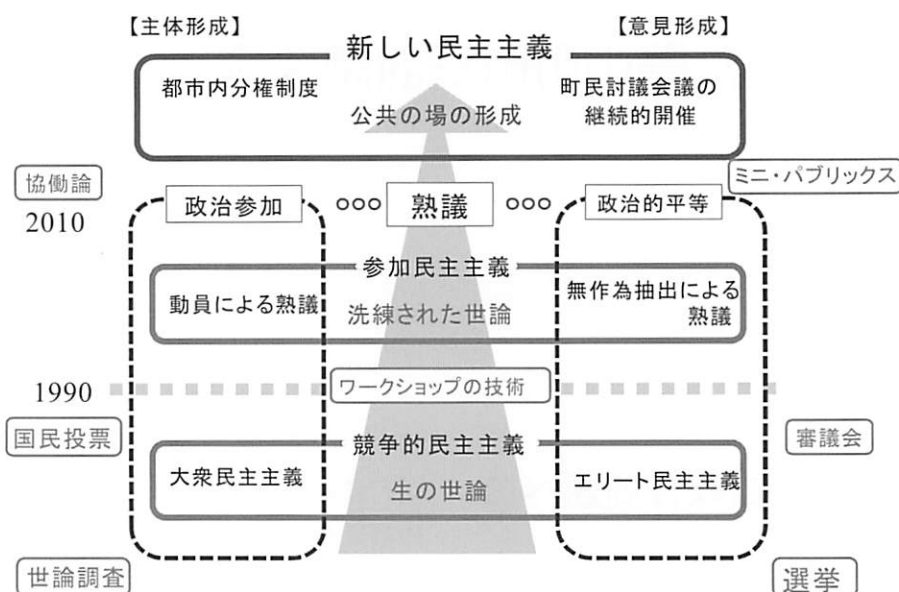
の中の一つである市民討議会は、無作為抽出（クジ）による参加手法として注目を集めている。豊山町における町民討議会は、コミュニティ規模（中学校区程度）における市民討議会の継続開催によって、多様な町民の意見形成に加えて、コミュニティの創出（主体形成）を目的とした社会実験として2011年より取り組まれてきた。

愛知県豊山町は、南は名古屋市北区、東は春日井市、北は小牧市、西は北名古屋市にそれぞれ隣接しており、南北約3.2km、東西約2.7km、総面積は6.19km²のコンパクトな自治体である。総人口は、15,300人あまり（2016年3月1日現在）、小学校が3つと中学校が1つというコミュニティがそのまま自治体となったような小規模自治体である。

豊山町にとっての町民討議会開催の目的は以下の3点に要約することができる。

- 1) 協働のまちづくりに対する意識向上の機会とすること
- 2) 潜在化している活動市民を発掘し、多様な町民の町政に対する参加意識を高めること
- 3) 総合計画の見直しに向けて幅広い町民の意見を5年間（2011～2015年）にわたり蓄積すること

一方、研究としての目的は、小規模自治体におけるミニ・パブリックスの概念に基づく無作為抽出市民による市民参加方式「市民討議会」の継続的開催が、これまでは困難とされてきた民主主義のトリレンマ3原則（「熟議」、「政治的平等」、「大衆の政治参加」）^{注2}全てを満たしうる可能性を理論的に指摘するだけでなく、実際の事例で実証することにあつた〔図-1〕。



【図-1】 参加民主主義の発展と民主主義のトリレンマ

3 総括としてのシンポジウムの開催

5年間の豊山町町民討議会議の全体構成を[表-1]に整理する。町民討議会議は2011年に第1回が開催され、その後毎年2日間ずつ2015年まで5年間にわたり継続的に実施された。町民討議会議の開催に当たっては、住民基本台帳を基に毎年2,000名（3回目までは18歳以上、4回目以

降は15歳以上）を無作為抽出し、町長名で招待状を直接本人に送付した。応募者が50名を超えた場合は抽選によって参加者を選択し、実際には毎回40名ほどの参加者を得ている。

6年目の今回は、過去5年間の町民討議会議を総括し、継続を含めた今後の展開について考えるシンポジウムを開催することになった。

【表-1】 豊山町町民討議会議の全体構成

年度	日程	参加者数	テーマ
第1回 (2011)	10月30日(日) 11月6日(日)	41名	・重点戦略の中で、住民の理解と協力が必要なもの ・総合計画の中の重点事業以外の重要な事業を提案
第2回 (2012)	10月14日(日) 11月4日(日)	30名	・地域公共交通を考える ・豊山町の防災問題を考える
第3回 (2013)	9月29日(日) 10月5日(土)	42名	・豊山町の防犯を考える ・地域のリーダーを考える
第4回 (2014)	8月2日(土) 8月3日(日)	41名	・豊山町の総合計画の見直しの論点整理 ・後期基本計画に盛り込む内容の検討
第5回 (2015)	8月1日(土) 8月2日(日)	46名	全体テーマ：地域で子どもを生き活きと育てられるまち ・豊山町の魅力発信・PR戦略について考える ・総合戦略のアクションプランを考える

※1：開催時間は毎回午前10時～午後4時30分

※2：「参加者数」欄は2日間通して参加した人の人数

※3：2012年度は、当初予定の第1日目（9月30日）が台風の影響で開催できなかったため、10月14日の会議の際に複数の候補日を挙げて参加者の都合を尋ねた上で11月4日に決定して実施した。参加者の都合も考慮したとはいえ、急な日程の追加のため、参加できない人も多かった。

4 実行委員会としての「まちづくりサポーター」の誕生

2014年度の町民討議会議において、町民討議会議を小規模化したものを年数回開催すべき、という意見が出された。この意見を受けて創設されたのが「豊山町まちづくりサポーター」(まちサポ)である。まちサポは、2015年9月に、町民討議会議の参加者6名を含む、高校生から60代までの町民9名で発足した実働組織である。まちサポは、高校生や20代という若い町民が参加しているという点の特徴である。彼らは、無作為抽出をされたことがきっかけとなり、町民討議会議がなければおそらくこうした役割を担うことはなかったであろう。少なくとも、町民討議会議は、新たなまちづくりの担い手の発掘、育成に効果を発揮した事は間違いない。2016年度に計画された過去5年間の町民討議会議の総括シンポジウムは、このまちサポを中心に開催することになったのである。参加者から主催者へ。町民討議会議の新しい展開が期待される場所である。

5 シンポジウム当日の報告

2017年1月22日(10:00~15:30)に「町民討議会議・シンポジウム」は開催された。今回はこれまでの町民討議会議に参加したことのある人を対象に、郵送で参加募集を行い、応募者の中から抽選で選ばれた44名(6名欠席)の方が、8つのテーブルに分かれて市民討議会方式の討議を行った。テーマは、①豊山町の魅力を高めるために、②町民討議会議の今後についてであった。

1) まちサポメンバーの活躍

最初のテーマの情報提供として、まちサポメンバーが寸劇を行った。現役の高校生が「豊山町」の知名度の低さに嘆き、どうやったら町の魅力を高めていくことができるのだろう!と悩むシナリオを通して、討議参加者へのわかりやすい問題提起を行ったのである。寸劇をワークショップの情報提供として活用したのは、私自身が20年ほど前



に区画整理のまちづくりで試みたことがあったからだ。その時は、行政職員が役者として職員の悩みを演じるという設定だったが、今回は、豊山町の高校生を中心としたまちサポメンバーが演じ、大学生が脚本と演出を担当した。演劇の持つコミュニケーションの力は本当にすごい。孫ほども違う若者の演技にすべての参加者が笑顔で食い入るように引きつけられていった。

2) 個人に還元できない話し合いの成果

一つ目のテーマである「豊山町の魅力」と「豊山町のPR方法」の提案では、参加者の感想にも「MRJとか神明公園やイチローばかりクローズアップされて、もうあきあき……。それ以外でテーマを絞った方がよいかも。」と言った指摘にもあるように、やや他力本願でボタン化した内容にとどまったが、最後には「豊山町町民討議会議での学びは、これからの生活をよりよくする為にも大変よい経験となり希望が持てました。」といった声も聞くことができた。

二つ目のテーマである「今後の町民討議会議の検討テーマ」では、「公共の場の今後の活用」、「高齢者と若者のコミュニケーション」、「交通問題」などが提案され、町民全体の意識が無理なく反映した結果になったように感じる事ができた。毎回のことではあるが、グループディスカッションの結果は、参加者個人には還元できないプロセスを経て、多くの町民が納得できる妥当な結論にたどり着くものである。

3) まちサポに対する大きな期待

二つ目の討議に先立って、まちサポメンバーから、今後10年間を見据えた、町民討議会議の継続

と目標について熱の籠もった提案がなされた。

「残念ですが、町の計画による町民討議会議は去年までの5回でした。しかし、この貴重な場は、町や町民のために、今後も続けていくべきと考えました。今回シンポジウムを実施したことで、この会議継続の必要性を確信しました。私たちまちサポは、豊山町民としてここに町民討議会議の継続を提案いたします。これには、町そして皆さんの理解と協力が必要です。しかし、その継続にどんな意義があり、実現のためには、何をすべきか、目標を明確にする必要があります。そこで二つの目標を考えました。

①この会議はまちサポ主体で行われるため、過去5回の会議のように、会議の内容が総合計画に盛り込まれるといったように、町政に直接は反映されません。しかし、無意味に議論して自己満足の会議になるのではなく、議論するテーマを町民で決めます。つまり、町民が本当に必要だという町の課題がテーマになります。町民の生の声そのものです。町が協力し、職員も立ち会い、町長や議員にも傍聴してもらいたい。この会議で出された課題・テーマや結論は、町民提言として町に文書で渡します。勿論そのすべてが採用されるわけではありません。だからこそ、町民主催の町民討議会議は、行政や議会、つまり町民が対等な関係で直接向き合い、町民が直接町に伝えるという、住民自治の場となるのです。これを第一の目標としたい。

②町民討議会議は過去5回行われました。1回で40名の参加だから、これまでに200名が参加したことになります。参加者はこの経験を家族の前で話すことでしょう。町には約5千世帯ありますから、これまでに約4%の人が参加したことになります。たった4%と思うかもしれませんが、もしこの会議を今後10回（10年間）続けたら、これまでと合わせて約12%の人が参加したことになります。住民の1割以上です。住民が集まれば10人に1人は参加したことになる、因みに物事の認知度は10%を超えると一気に広がると言われています。さらに招待状は1回で2千人に送付されますから15年間で3万人、町民一人に対して2回は送られることになります。すると、町民討議会議を



知らない人はいなくなり、そうなれば町民に根付いたと言えるでしょう。まちサポ主催で今後10年間、毎年1回の開催をすることが二つ目の目標です。」

以上、2点の目標が提示され全員拍手で承認されたのである。「今日、町民討議会議に参加して、まちづくりサポーターの誕生に感動しました。これからは、まちサポを中心にして、私の大切な豊山町は安心して世代交代ができます。まちサポの人たちの夢に少しでも協力してサポートして行きたいと思います。」という参加者の感想からは、まちサポの強い思いが伝わったことが読み取れる。

4) 市民の間に「信頼」を創出する町民討議会議

町民討議会議に参加した人の中に生まれた信頼が、果たしてコミュニティの範囲に広がっていくのだろうか？今年のシンポジウムを見ていて、会議の場そのものが僕には奇跡のようにも思えたのである。それは何故だろうか？高校生を中心とした「まちサポ」による寸劇がすばらしかったからなのか。町民討議会議に参加する人達が当たり前のようにグループディスカッションを進めていく熟議定着の様子に感心したからなのか。グループディスカッションの成果のリアリティに納得したからなのか。参加者が共有することができていた「信頼」感に共感したからなのだろうか。理由はいくつか考えられるが、会場を満たしていた空気感は、決して一人では得られることのない、市民社会が創出する民主主義の確かな感覚だと感じた事は確かである。ミクロ-マクロ媒介問題の観点から言えば、知らない人にまで「信頼」が拡散していく可能性を感じたということなのだろう。



この知らない人への信頼の拡散が、個人と市民社会を架橋する秘密なのではないか。豊山町町民討議会議が挑戦してきた継続開催の意味は、個人と市民社会を媒介する熟議の実現である。この感覚は、6年間育ててきた継続の結果であることは間違いないのである。

6 小規模自治体における継続開催の意味

マイクロマクロ媒介問題には二つの側面があると考えられる。一つは個人と熟議参加者間の媒介問題である。これはある程度技術的な問題である。熟議民主主義論の規範的アプローチでは、個人的・個別的次元と集合的次元を媒介するのは、個人の意見の変化を引き起こすような熟議の中で生まれる公共精神だといわれている^{注-3}。このことはこれまでの町民討議会議の経験とも符合している。

二つ目の問題は、熟議の結果の正当性の問題である。熟議に参加していない人を含めた意思決定にどのように熟議の結果を結びつけていくことができるかというマイクロマクロ媒介問題である。ミニ・パブリックス手法の実施を制度的に位置づけることにより、この部分のマイクロマクロ媒介問題を実際上乗り越えることは可能かもしれない。この制度化問題の根拠を得るために、5年間豊山町で提案し試みてきたのは、第一に討議対象者の範囲（マクロ）をできるだけ小さく設定すること（中学校区程度）と、第二にミニ・パブリックスとして開催した町民討議会議を継続的に繰り返し実施する（毎年1回5年間）という提案であっ

た。この方法によって二つ目のマイクロマクロ媒介問題解決の可能性を示そうとしたのである。

田村は熟議民主主義を現代社会が必要とする民主主義と位置づけ、「熟議」と「民主主義的な権威」の並び立つ民主主義モデルを提起している^{注-4}。そして「熟議的意思決定」と「民主主義的な権威的意思決定」を媒介するのは、人々の「信頼」であるとしている。市民討議会の役割は、この「信頼」を市民社会の中に生み出すことであると考えられる。もちろん市民討議会の場の熟議が、時に「政治的争点」化し広範囲の意見形成を必要とする議論に拡大していくこともあるだろう。しかし、多くの場合は「固定的争点」を扱う、「信頼」を媒介とした民主主義的権威としての役割を果たしていくことが想定される。これが一つのマイクロマクロ媒介問題解決のイメージである。

こうした熟議民主主義的なモデルを豊山町を舞台に思い描くことができるとすれば、このモデルは都市内分権された地域自治組織における自治モデルとして敷衍することも可能であろう。権威と熟議の「競合的關係」のダイナミックなバランスを保つ民主主義モデルとして、小さな範囲での市民討議会の継続開催をミニ・パブリックスの制度化の一つとして位置づけることができる。

今後豊山町における社会実験から検証すべき課題は、町民討議会議の熟議の結果に対して非参加者が「信頼」を感じることができかどうかを検証することである。その際、まちづくりサポーターが重要な役割を果たすであろう事に期待して一先ず筆を置くこととしたい。

注

^{注-1} 「現代社会の存立構造／『現代社会の存立構造』を読む」真木悠介・大澤真幸 朝日出版社 2014. 9. 30

^{注-2} 「人々の声が響き合うとき」ジェイムズ・S・フィッシュキン 著早川書房 2011. 4. 20

^{注-3} 「熟議の理由－民主主義の政治理論－」田村哲樹 勁草書房 2008. 3. 25 p39

^{注-4} 「熟議の理由－民主主義の政治理論－」田村哲樹 勁草書房 2008. 3. 25 p168